

開祖大先生と大本

ブルガリアから下記の依頼があり、大先生の大本教から受けられた影響や大先生の大本**本部**でのお過ごしなされた時期についての資料集めの協力を求められている。

1. 合気道の価値体系や開祖大先生のお考え
 2. 大先生の合気道についてのアイディアや大本教派神道の教義
 3. 大先生の大本**本部**での滞在時間とその滞在時間の先生の人生と合気道稽古への影響
- というテーマです。

この本はヨーロッパ全体的で大先生の大本教との関係、具体的に:**大先生の大本本部でのお過ごしなされた時間、大本教神道を教わった際のご活躍とその後合気道稽古で反映された大本教の影響本などについて語る初めての作品となります。**

要約 (Summarize)

合気道開祖植芝盛平大先生（以下、大先生と略す）は、創始された合気道が宗教の真理と一致していたことから宗教の真理を表す言葉を使って説明された。宗教の真理を表す言葉は定義が明確であるが、戦後の日本人には分かりづらい言葉となっている。また、意味が重層している（多義である）ので、読む人によって理解の程度が異なることがあるが、かえって含蓄に富む教えとなっている。

この宗教の真理は、国学に根差した大本教の教えと『古事記』を言霊で解釈した中西光雲・清雲夫妻の『布斗麻邇古事記』（発刊はされていないが、夫妻の著書から内容が推測できる）に述べられている。それで、大先生は、「合気道が強くなりたかったら『霊界物語』（大本教の教え）を読みなさい」「合気道を学ぶものは『古事記』を学びなさい、なぜならば合気道は古事記の営みであるのだから」と諭されている。

ここでは、大先生と大本（出口王仁三郎聖師）との関係に加え中西光雲・清雲夫妻との交流にも触れ、大先生が創始された「合気道」とは何かということに言及した。そして、合気道を修行する人によって理解が多様であることを承知の上で、大先生は、「万有愛護の心で、宇宙の中心と一致している自分の中心に相手を吸収して、相手と一体になってこの世を浄める技を産み出す道として合気道を始められた」と結論付けた。そして、「合気道を修行することによって地上天国を建設する」という目的が大本教という宗教の目的とも一致していることを示した。

用語及び定義 (Terms and Definitions)

1. 合気 (aiki)

大東流に「合気」と呼ばれる術理（理合・技術、理合とは「技が有効に働くための体や武器の使い方の定理的なもの」）があり、「相手を無力化する技術」と定義されているが、大先生が「合気」と称しているものは、これとは異なり、「神人合一の意を簡略にした意味をもつ」（③ p. 164）と同時に「合気とは愛なり。天地の心を以って我が心とし（神人合一して）、万有愛護の大精神を以って（万有愛護の心で）自己の使命を完遂すること（である）。」（神示「合気道の精神」）という意味、すなわち「神の愛」「愛気」という意味も含んでいる。

『「合気」という名は、昔からあるが、（言霊的に）「合 (ai)」は「愛 (ai)」に通じるので、私は自分の会得した独特の道を「合気道」と呼ぶことにした。したがって、従来の武芸者が口にする合気と私

の言う合気とはその内容が根本的に異なるのである。』(① p. 50) というのは後者の意味の説明である。

「神人合一」という意味は出口王仁三郎聖師から与えられた。

「神の愛」という意味は 1925 年（大正 14 年）の春にご自身が黄金体と化す体験（⑥ p. 17）をされたことと中西光雲・清雲夫妻を通しての神示によっている。

「合気道」という流名の「合気」にはこれら二つの意味が込められているが、大先生が「合気」を説明されるときには次のような言葉で示されている。

（数字は記載ページを示す。）

合気に関連する言葉	合気神髄 ⑦	武産合気 ⑥
合気の起源	51（期限は間違い）、123	
合気の稽古	62、161	
合気の根源（合気の根元）	19	152
合気の根本の目的		111
合気の使命	73、150	140
合気の神髄	87	
合気の魂の円	121	
合気の鍛錬（武道の鍛錬）	42	18
合気の原理（合気の理）	36、38	192
合気妙応（合気妙用。合気の妙用）	75、87	28

合気道においては、「合気」は理念（万有を愛護する）であり、そのまま術理（神人合一して万有愛護の心で一体となる）でもある。

「万有愛護」という言葉は、「全世界の人類のみならず万有を愛護（すること）」（出口王仁三郎著作集第 3 巻 愛と美といのち）と説明されているとおり、聖書の「神は愛である」（ヨハネ伝 3:16）の「愛」と同じ意味で、被造物すべて（万有）を愛される神の愛を表している。

2. 気 (ki, 中国では chi)

気は英語の Aura（アウラ）やラテン語の spiritus（スピリトゥス）、ギリシア語の psyche（プシュケー）、pneuma（プネウマ）、あるいはサンスクリットの prana（プラーナ）と同じく、生命力や聖なるものとして捉えられた氣息、つまり息の概念がかかわっている。いくつかの意味がある。

- 情報（感応によって相手の気を感じる）
- 意識（念）でコントロール出来るもの。

開祖が「気」と言う時、「愛の気」と受け取ると理解しやすい。

念彼観音力は、「世の人々の苦や悲しみを観て、またはその声を聞きすぐさま駆けつけて、33 のお姿に身を変えてお救い下さる観世音菩薩のお力を信じ一心に念ずれば」という意味で「愛の念力」「愛の気」と同義。

3. 言霊 (kotodama, kototama)

言葉は力であるという時、単に音ではなく言葉に宿る霊力という意味で言霊という。
開祖が「言霊」と言う時、「愛の言霊」と受け取ると理解しやすい。

ス：好く好かぬのス、愛の言霊

ウ：結ぶ、浮く、動く働きがある言霊

ア：天を表す言霊

オ：地を表す言霊

4. 結び (musubi)

『古事記』に「産巢日」、『日本書紀』に「産霊」という字で表されている神道の根本的な思想を表す言葉で、天地・万物を生成・発展・完成させる霊的な働きを指す言葉である。

性質の異なる二つのものが融合して新しいものを生み出すことで、科学的な現象では核融合がこの意味に近い。

夫婦（男と女）が結び合って生まれてくる男の子を「息子（むす+こ）」、女の子を「娘（むす+め）」
というのは、この結びの思想から来た言葉である。

合気道で相手との接触点に力を入れないで軽く触れるようにすることを「結び」という人もいるが（Wikipedia「合気道」）、それでは「核融合」のような結びとは異なる。

大先生が云われる結びの本質は、次のとおりである。

- ・ 宇宙の中心と自分の中心を結ぶ（「宇宙の中心に結んで」⑦ p. 28）
- ・ 相手をその中心に迎え入れて結ぶ
（「人の目を見たり、相手の技を見たり、姿を眺めているんじゃ無いですよ。全部自分の腹中へ、身の内へ入ってしまうんですよ。自分の腹の中に在るんだから別に争う必要が無い。大宇宙が自分に在るという事や。全宇宙が自分の腹中に在る事や」昭和 40 年頃のラジオ会見記『合気ニュース』142 号 p. 15）。

気結び（⑦ p. 68）、真空の気（宇宙に充滿している気）と空の気（自分の体の周りを囲む気）の結び（⑦ p.67）、信念むすび（⑥ p. 72）、等々の言葉があるが、「信念むすび」や「愛の念力」（⑥ p. 128）という言葉から念（image）によって結ぶことから始めるのが良い。

5. 神 (Kami)

日本でいう「神」は、本居宣長の『古事記伝』によると「尋常ではない霊威を発するもの（英語では **Something Great** か?）」という存在とされている。目に見えないので『古事記』の「隠身（かくりみ）」の音が詰まって「かみ」になったという説もある。

「神」を英語で **God** と訳すと正しいニュアンスが伝わらない。大本では一神教の創造主（**Creator, God**）、多神教の神々（**the Almighty** の働きのそれぞれを個別の神として表す。合気神社に祀られている 43 柱の神々もそれぞれが合気道の働きのある側面を表している）、汎神教の神（宇宙に神が宿ることから宇宙）をすべて「神」と言っており、大先生も同じ考えである。

6. 神人合一 (shinjin-goitsu)

「神人合一」という思想は日本にしかない思想で、祭祀や修行をすることによって人間が神になる（神との一体感を得る、神の境地に近づく）という思想である。

大本では「神は万物普遍の霊にして人は天地経綸の主体なり、神人合一して茲（ここ）に無限の権力を発揮す」ということが教えの真髄とされる。具体的には、自我（執着心）を去り、神に真剣に祈り、結果を臆せず、精一杯に自己の最善を尽くすこと、念ずることいよいよ篤（あつ）く、努めることますます真剣であつてこそ、神人合一して、無限の力が発揮される、と教えられている。

霊肉一体（霊体統一）、宇宙と一つになる（我即宇宙）、「私は、この地球全体が我が家、日月星辰はことごとく我がものと感じるようになり、眼前の地位や、名誉や財宝は勿論強くなろうという執着も一切なくなった。」（⑥ p. 18）ということ。

体から熱や光が出るようになった状態（ヨーガでチャクラが開いて宇宙と繋がった状態）を表す言葉でもある。

「神」を創造主と解釈したときの天地創造の神の心（愛）を我が心とすることも、これに含まれる。

7. 宇宙 (uchu)

宇（空間）と宙（時間）を表す言葉（space and time）。

大本の「天地経綸の主体」の「天地」のこと。天は地上に対する宇宙であり、現実世界に対する霊の世界、地は地上であり、現実世界である。なお、「経綸」とは整え治めることである。

大先生の「宇宙の真理」は「神の真理」のことであるから、神と同じ意味でも使われる。

8. 武、武道、武芸 (bu, budo, bugei)

英語の Martial arts とはニュアンスが異なるので、Budo (Budō) などと、そのままに表記するのが良い。

殺傷を目的とした技術ではなく、戈（ほこ）を止める、即ち戦いを未然に防ぐための人間力（人格）を養う方法（道）をいう。

柔道の創始者 嘉納治五郎が、「武道」という言葉に次のような定義を与えた。

— 戦闘の訓練が「武術」であり、その武術の修業をつうじて人間完成を目指すのが「武道」である —

日本武道協議会が制定した「武道憲章」は、この定義を踏襲して「心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、身体を鍛え、心胆を錬る修業道・鍛錬法」と書かれている。

大先生は、「武は愛なり」と言われているので、この定義の概念を超えたものを「武」「武道」とされている。即ち、相手を殺傷しないだけでなく、相手を愛おしく思い（愛の気を生じ）、いたずらに力で争わず（相手の気持ちを受け入れる無抵抗主義で、接触点に力を入れず）、相手を包み込むようにして相手の争う心を和らげて導き、技を施すという稽古を通じて人格を磨くことが真の武の道である、と。

9. 武産 (takemusu)

「武産とは合気道の原理を研鑽することにより、無限の技が生まれてくるという、実技の問題である」(斉藤守弘)と伝えられている。

合気道の原理(理合)である「(愛の気による)産びの武」という意味と、無限の技を生む「武を産む」という意味を併せ持つ言葉である。

「武産さむはらの合気」(⑦ p. 78)と書かれていて、「武産＝さむはら」である。

中西光雲・清雲夫妻を通した神示で与えられた言葉で、中西光雲が言霊で解釈して「さむ：開いて結ぶ」「はら：孕んで結ぶ」と説明していることから、開く(息を吐く、宇宙一杯に拡がる)、孕む(息を吸う、相手を腹中に吸収する)という「阿吽の呼吸の理念力」(⑦ p. 12)、即ち、呼吸力を発揮して無限の技を生み出すこと。

「武における業はすべて宇宙の真理に合わせねばならぬ。宇宙と結ばれぬは孤独なる武にすぎず、愛を生むく武産の武とは異質のものである。合気は愛を生むく武産の武であり、大和大愛の愛気にはかならぬ。そのく武産の武のそもそもはく雄叫びであり、五体のく響きの槍の穂を阿吽(あうん)の力をもって宇宙に発兆したものである。」(⑤ p. 14)からも呼吸力(阿吽の力)が武産と関係していることが分かる。なお、宇宙に発兆するとは宇宙一杯に拡がることである。

10. 禊 (misogi)

神道で穢れ(罪、病氣、災害、戦争、貧乏、借金、怒り、憎しみ、愚かさといったネガティブなことすべて)を滝や川、海で浄めること。

大先生は、気枯れ(けがれ)が災い(生命力が低くなっている状態)を招くので、愛の気によって生命力を回復することを禊といい、合気の技を禊技と言っている。

実際、大先生の受けを取ると、「ずっと吸い込まれるような感じがする」「投げ飛ばされても気持ちよく受身が取れる」「一つになってしまう」という感じや気持ちになり、幸せを感じられる。

11. 地上天国 (chijo-tengoku)

地上天国とは、誰もが存在や個性を受け入れられ、そこにずっと居たい、自分の持てる力(talent)を発揮したいと思うような世のことで、「万民和楽の地上天国」という表現がなされている。

大本は、前述のとおり宇宙万物を創造された主神(ス神、創造主と考えて良い)の愛善(神の愛)と信真(神の智)にもとづく地上天国建設を目的としている。

合気道も地上天国建設を目的としており、宗教的ではなく武道的にそれを達成しようとして創始された。

合気道の技が禊の技となり、自分と他人の価値や存在を認めて(I'm OK, You're OK)技を掛け合う稽古そのものが楽しいものとなり、稽古をしている場所(道場)が天国と思えるようになることが目的で、また、その中で人格が形成され向上することが目的である。

12. 呼吸力 (kokyu-ryoku)

大先生の合気道の技の根本的な術理(理合)であり、『武産合気』、『合気神髓』等の道文や道歌の中で

述べられている主要なテーマとなっている。

『武産合氣』『合気神髄』の中では「念力・愛の念力」(⑥ p. 128、⑦ p. 78、81)、「念彼観音力(ねんぴかんのりき)」(⑥ p. 48、67、128、⑦ p. 80、119、129、159)、「気魂力」(⑦ p. 53)、「対照力(たいしょうりょく)」(⑥ p. 92、93、174、175、⑦ p. 119)、「八大引力・八大力の引力・八つの引力・八力の引力」(⑥ p. 78、88、⑦ p. 79、112、143)という言葉で表されている。

指導者や研究家によって「脱力(リラックス)」(藤平光一)、「集中力・中心力」(塩田剛三)、「勁力(中国武術で使われる力)」(吉丸慶雪)などと表現され、混乱がある。

「呼吸力」は盛平が自らの武道を確立する過程で生み出した造語であり、「合気」を盛平独自の主観を通して表現したものである。

合気道における「合気」が主に理念的な意味で広く用いられるのに対し、「呼吸力」は主に「技法の源になる力」という意味合いで用いられる。(ただし理念面でも「呼吸」「呼吸力」は用いられることがあり、両者の違いは必ずしも明確ではない。)

この「呼吸力」が具体的に何の力を指しているかについては、様々な言説がある。盛平は弟子達に合気道の理念、理合を説明する際、古事記の引用や神道用語の使用が多く、難解・抽象的な表現であったため後代様々な解釈が奔出することになる。例えば「呼吸(筋)の力である」「“気”の力である」「実際の呼吸のように自然で無意識的な力の使い方である」「全身の力を統一したものである」など、意見は多岐に分かれる。(Wikipedia「合気道」)

大先生の呼吸力は、天の呼吸(日月の運行)が地の呼吸(潮の満干)を引き起こすように、接触点で作用・反作用の力を感じることなく(受けと取りが争うことなく)、受けが吸い込まれる(引き込まれる)ような感じで動かされる力のことである。

「大先生の技には無理が全く無いのです。投げ飛ばされても気持ち良く受身が取れるのです。まるで吸い込まれる様な感じで。熟達していない人の技だと変な風に痛かったり怪我をさせられる事もありますが、そういう事が全くなく、本当に動きに無理がないのです。」(菅沼守人)

攻撃して来る相手の意識は必ず自分の中心に向かって来るので、それを愛の気(念力)で迎え、宇宙の中心と一致した自分の中心(腹中、臍下丹田)まで吸収し(結び)、一体となったら、無限大の宇宙の中心が動けば宇宙全体が動くと思って動く(捌く、技を施す、宇宙に発兆する)時に呼吸力が発揮される。

1938年(昭和13年)には「(愛の)気力」と称していたが(⑩ p. 36)、1942年(昭和17年)頃には「呼吸力」と言うようになったようである。しかし、呼吸力が何であるか、術理として理解できるように教えられることはなかった(大先生の話が難しく、何を伝えようとされたのか理解されなかった)。

「昭和17年(1942年)私が稽古を始めた合気武道の頃には、呼吸力の養成法として、呼吸法の業があった。しかし、どうしたら呼吸力が出るか、呼吸力とはどのような力なのか、それを説明し、指導する人はいなかった。ただ呼吸法としての形があるだけであった。」(砂泊誠秀)

大先生の言葉の「阿吽の呼吸の理念力」(⑦ p. 12) なので、『規範 合気道 応用編』の「呼吸力」に説明がある「自分の持っている自然の力」という説明では要を得ない。

「合気道の技の骨子となるのが、呼吸力、つまり自分の持っている自然の力です。呼吸力といふとなにか特別な力のように感じられるかもしれませんが、人間の体は自然に動かせば、呼吸力が出るような仕組みになっています。」(『規範 合気道 応用編』)

「武産」の定義に述べた合気道の原理のことで、「引力の練磨」(⑥ p. 32)、「引力の鍛錬」(⑦ p. 101)の「引力」、「合気の鍛錬」(⑩ p. 21)の「合気」のこと。

「引力の練磨」の一つが「呼吸力の養成」で、呼吸力は「自分の持っている自然の力」のように無意識に発揮できるものではなくて、練習によって身に付けるもの(⑩ p. 21 「合気ハ練習ノ徳ニ依ヨリテ自然ニ會得シ得ルモノナリ」)。

大先生が1938年(昭和13年)に『武道』を著わされた時には「氣力」や「合気」と表現されているが、大東流の「相手を無力化する技術」を表す「合気」とは理合が異なるので、区別するため「呼吸力」と呼ばれるようになった。

本文 (Text)

1. 合気道の価値体系や開祖大先生のお考え

合気道は、大先生が1920年(大正9年)に大本の出口王仁三郎聖師に会った時、次のように諭された考え(idea)が根幹となって創られた。

「わしの近侍になりなさい。本部づとめなどは向いとらん。人事や雑務に巻きこまれてはあかん。あんたはな、好きなように柔術でも剣術でも鍛錬することが一番の幽斎になるはずじゃ。武の道を天職とさだめ、その道をきわめることによって大宇宙の神・幽・現三界に自在に生きることじゃ。大東流とやらも結構だが、まだ神人一如の真の武とは思われぬ。あんたは、植芝流でいきなされ。真の武とは戈を止ましむる愛善の道のためにある。植芝流でいきなされ。大本の神さんが手伝うのやさかい、かならず一道を成すはずじゃ。」(④ p. 116)

そして、1950年(昭和25年)のことと思われるが、「(神人一如の) 真の合気の道」を体得し、地上に天国を建設するため、巡回指導、演武、講演会などを行い、広く普及することになった。

「それが7年前、真の合気の道を体得し、『よし、この合気をもって地上天国を作ろう』と思いたったのです。」(① p. 200)

この対談を行ったのが、「わたしも76(歳)になりますが」(① p. 219)という時であるが、この本『合気道』が印刷されたのが1957年(昭和32年)8月25日のことで、この時、大先生は満で73歳、数えて75歳であったので、数えて75歳を76歳と勘違いされたのだと思う。それで、1957年(昭和32年)から7年遡って1950年(昭和25年)のことであったと推定した。

真の武道とは「宇宙の真理から出てきた武道」(① p. 199)のことである。

合気道の名称は、源流の「大東流柔術」が1922年(大正11年)に「大東流合気柔術」になった以降、「相生流合気柔術」(1928年に)、「合気武術」(1929年に)、「皇武武道」(1931年に)、「合気武道」(1931

年 - 1933 年頃に)、「天真合気武道」(1942 年に)、「武産合気道」(1942 年 - 1948 年頃に)、「合気道」(1942 年に、更に 1948 年から現在まで)と変わっている。

大先生は、真の武道（真理に基いた正しい武道）としての合気道の概念を次のように五か条にまとめられている。これは、口述筆記を行った高橋英雄氏によると、大先生が合気道の概念をまとめられた 5 冊のノート（notebook）の中に書かれていたそうである。

「合気道とは、宇宙万世一系の理であります。

合気道とは、天授の真理にして、武産の合気の妙用であります。

合気道とは、天地人、和合の道となるのであります。

また合気道とは、万有の処理の道であります。

合気道とは、言霊の妙用であり、宇宙みそぎの大道であります。」(⑥ p. 28)

言葉を付け加えて解説すれば、次のような意味のことを説かれている。

「合気道とは、過去・現在・未来を通してありのままの真理（不変の真理）である。

合気道とは、神示によって与えられた真理で、武産合気の原理となっている呼吸力による非常に優れた、不思議な技を生み出すものである。

合気道とは、宇宙と結んで一体となり、相手と結んで一体となる武道、即ち和合の道である。

また合気道とは、万有の処理を行う原則である無抵抗主義（I'm OK, You're OK）に徹した武道である。

合気道とは、愛の言霊（愛の気）の働きで、愛の感応により宇宙・世界人類を正しく、エネルギーに満ちたものにする道である。」

「この道を思惟する人々は、宇宙建国完成（地上天国建設）の経綸（整え作り上げること）に奉仕しなければならないことになっております。」(⑥ p. 28)

即ち、万有愛護（の精神・心）により、人格と技を生成化育し（生み育て）、平和で平安な世へと修理固成する（地上天国を建設する）ことを目的としている。

このことを二代道主吉祥丸先生は、「合気道はいたずらに力に頼って他人と強弱を競うものではなく、お互いが切磋琢磨し、自己の人格の完成を願っての求道（修行道）である。」とまとめられた。

大本は、宇宙万物を創造された主神の愛善と信真に基づく地上天国建設を目的としているが、合気道も同じく以上のように地上天国建設を目的とする武道である。

2. 大先生の合気道についてのアイディアや大本教派神道の教義

大先生の合気道は、「合気道とはわしのことじゃ。」とか「合気道は私の他にないのであります。」(⑦ p. 99)と言われたように、大先生だけのものである。

晩年の 1965 年（昭和 40 年）1 月に大先生にある学生が「翁先生の合気道はどなたに伝えられているのですか？」と尋ねた時の答えが「誰もいない。」であった。「それでは誰について習ったら宜しいのですか？」と重ねて質問したところ、「誰でも良いから誰かについて習いなさい。あるところまで習ったら、後は自分で見出すものじゃ。」ということであった。

「すべて道はあるところまで先達に導かれますが、それから後は自分で開いてゆくものなのです。」(⑦ p. 182)と道文にあるとおりである。

この会話を裏付けるように、実際に大先生について指導を受けた方も次のように語っている。

「植芝盛平先生の指導方法は、技を示すだけで技の説明はほとんど成されませんでした。歩けば技になる、手を上げれば技になるといわれ、入身投、四方投、小手返などの技をされるだけです。稽古中のお話は古事記や神様の話で、残念ながら私にはほとんど分かりませんでした。30分位話され突然受身をとられますので、足が痺れない様にと気を使い、その方が大変でした。」（小林保雄）

「内弟子であった先生が分からなかったのなら、大先生に直接接したことのない若輩にはとても無理」と考えないで、「よし、この合気をもって地上天国を作ろう（他の人に伝えよう）」とされたことや、「後は自分で開いてゆくものなのです」という言葉を信じたい。合気道の稽古と関連付けて大先生の言葉（道文、道歌）を探究すれば、必ず分かるようになるはずである。

剣道のような日本古来の武道の伝書も、門外漢にはよく分からないが、大先生の合気道は、幸い宗教の言葉で幾重にも言葉を重ねて説明されており、この宗教の言葉が比較的定義が明確になっているので、宗教だからと敬遠しなければ、古来の伝書を読むよりも分かりやすいものである。

「皆、大先生の言うことを聞こうとしなかった——。技の形だけ覚えようとしたんですね。『わしの技を真似してどうすんじゃ。技は一度出したら終（おしま）いじゃ』と大先生は言ってたにも関わらずです。大先生は神様みたいなことを言うからわからんと、きちんと聞こうとしなかったんですよ。」（西尾昭二）

西尾先生の言葉にあるように、人生万事「分かりません」で済ましていると薄っぺらなものになってしまう。もう一山超えるために、大先生が遺され言葉をじっくりと研究してみることが求められており、それが「自分で開いてゆく」ことになるのではなかろうか。

合気道は「宇宙の真理から出て来た武道」なので、必ず理解できるはずである。

大先生が「合気道が強くなりたかったら『靈界物語』を読みなさい。」と諭されているが、幸い宗教の言葉は『靈界物語』に載っている言葉が多く、「出口王仁三郎と靈界物語の総合検索サイト」(<http://onidb.info/>)で検索できる。

「合気道を学ぶものは古事記を学びなさい、なぜならば合気道は古事記の営みであるのだから。」という言葉も参考になる。「古事記の営み」とは「宇宙の営み」である故、「宇宙の真理から出てきた武道」と言われるのであろう。

「武における業はすべて宇宙の真理に合わせねばならぬ。宇宙と結ばれぬは孤独なる武にすぎず、愛を生むく武産>の武とは異質のものである。合気は愛を生むく武産>の武であり、大和大愛の愛気にほかならぬ。そのく武産>の武のそもそもはく雄叫び>であり、五体のく響き>の槍の穂を阿吽(あうん)の力をもって宇宙に発兆したものである。

五体のく響き>は心身の統一をまず発兆の土台とし、発兆したるのちには宇宙のく響き>と同調し、相互に照応・交流しあうところから合気の《気》が生じる。すなはち、五体のく響き>が宇宙のく響き>とこだまするく山彦>の道こそ合気道の妙諦にほかならぬ。

そこに高次の気魂の熱と光と力が生じ、かつ結ばれることとなる。微妙にこだまする五体と宇宙く響

き>の活性が『気の妙用』を熟せしめ、武なる愛、愛なる武としての<武産合気>を生ましめるのである。」(⑤p. 14)

この古事記は言霊で解いたもの（逆に言えば言霊の原理によって書かれた古事記）であるから、出来れば『布斗麻邇古事記』を探究した中西光雲・清雲夫妻のことも調べるのが良い。

合気道の稽古と関連付けて、大先生の合気道を一言で言えば、次のようにまとめることができると思う。

「愛の気持ちで相手を腹中に吸収し、相手と一体になって動く時、即ち呼吸力によって相手と争わず、相手を導く時に無限に技が生まれる武産合気という大先生の合気道になる。」

大本の教義で言えば「言向け和（やわ）す」「無抵抗主義」で、言向けの「言」は愛善の言霊のことなので、このことから、大先生が「(愛の) 言霊の妙用」「(愛の) 気の妙用」と教えられたことの意味が分かる。

『霊界物語』と『布斗麻邇古事記』を調べ「大先生の合気」と「大先生と古事記の営み」としてまとめたので、参考にして頂ければ幸いである。

3. 大先生の大本**本部**での滞在時間とその滞在時間の大先生の人生と合気道稽古への影響

合気道本部道場の考えは、合気道が特定の宗教と結びついているとの誤解を避けるため、極力大本には触れないようにしている。

しかし、大先生の合気道の方向付けをしたのは大本の出口王仁三郎聖師で、大先生が合気道を説明される時の言葉の多くが大本から来ている。

大先生も特定の宗教を勧めているのではないので、宗教だからと毛嫌いせず、神の言葉と思って受け入れて、研究するのが良いと思う。

「道主（大先生）の言の葉は神よりの言なれば、明らかに受け入れること至難や、遠き人は一日でも一時でも、常盛（大先生）の真（宇宙の真理に基づく）の実行相（合気道）を学びとられよ。」(⑦ p. 143)

大先生は、危篤の父親の病氣平癒祈願のため、1919年（大正8年）12月27、28日に初めて大本の本部がある綾部を訪れ、出口王仁三郎聖師に会っている（④ p. 303）。これが初見である。

翌年1月2日に故郷 田辺に向けて綾部を出発し、1月4日に帰郷している。その間、3日間、大本で瞑想行（鎮魂行）を行っている。

「それはともかく、暮れもおしつまった大正8年(1919年)12月27、28日ごろ綾部に着いた開祖が…」(④ p. 109)

「いずれにせよ開祖は3日間、綾部において心気の統一をはかったのち、(綾部から大阪までは鉄道で)大阪から海路、田辺へと帰郷した。年があけて、大正9年（1920年）1月4日のことである。」(④ p. 112)

「大本教に4、5日居て、田辺に帰ったら父は死んでいた。」(③ p. 39)

この時、密教の加持の印行を行ったと言われているが、正しくは「鎮魂行」を行ったのだと思う。綾部で出口王仁三郎聖師という特別な霊能者に会って、自分勝手に密教の行を行うことは考えられない。

「さて、本部で、危篤の父の平癒をお祈りしていただきたいむねを告げると、金竜殿（大本の神殿の一つ）に通されて、しばらく鎮魂祈念するようにと助言された。端座瞑目（正座して目をつむること）し、かつて習いおぼえた密教の加持の印行（いんぎょう）をおこなっている…」（④ p. 110）

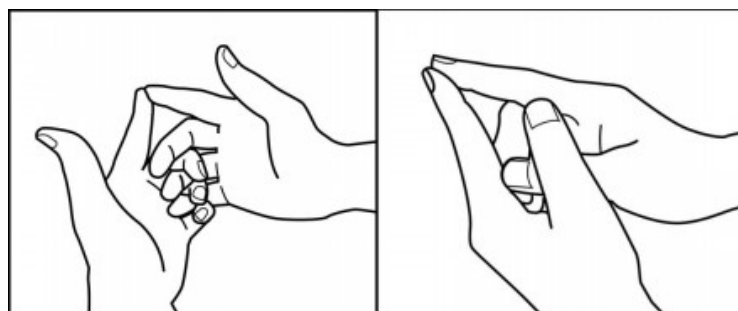


大本教綾部総本部の金龍殿で「鎮魂帰神法」の神人合一の神懸り感合をする信者達
（鎮魂印を結んでいる）



密教の加持祈祷の印行
（「臨」の印を結んでいる）

（鎮魂印の結び方：http://high-principled26.rssing.com/chan-13977614/all_p59.html）



上の写真にあるように鎮魂印と密教の臨の印はほとんど同じなので、初めての大先生はてっきり密教の印だと思われたかもしれない。

なお、「修法は、指を結び目をつぶって下さい。」(⑦ p. 128)と書かれている「指を結び」が「鎮魂印を結び」であるが、大先生は、鎮魂行（鎮魂帰神法）を一人で行うことを禁じられている。審判者（さにわ）と一緒に付いていないと、悪い霊が憑いた時に対処できないからである。

この初見で、出口王仁三郎聖師に「自分にそなわった武術があるのだから、人が作った武術を習ってはいけませんよ」と助言されている。

この時に出口王仁三郎聖師に惹かれ、1920年（大正9年）2月に綾部移住のための打ち合わせに再び綾部を訪れ、春も過ぎようとする頃、一家を挙げて綾部に移住し、出口王仁三郎聖師の近侍（valet, attendant、外に出る時のお供や身回りのお手伝いをする役）を務めるようになった。

綾部移住を決意した旨の挨拶に行った時、出口王仁三郎聖師から「大東流とやらも結構だが、まだ神人一如の真の武とは思われぬ。あんたは植芝流でいきなされ。真の武とは戈（ほこ）を止ましむる愛善の道のためにある。植芝流でいきなされ。大本の神さんが手伝うのやさかい、必ず一道を成すはずじゃ。」と諭され、これが合気道創始のきっかけとなった（④ p.116）。

そして、このことが後の「出口王仁三郎先生ぐらい偉い先生は知らんね。」とか「私の真の姿を認めてくれたのは、五井先生（白光真宏会の五井昌久先生）と出口王仁三郎聖師だけだ。」という述懐に繋がっている。

なお、大本信者としては、甥の井上要一郎（与一郎と書かれているが要一郎が戸籍名、方軒、鑑昭などとも名乗る）が先に1917年（大正6年）に入信していたので、まったく大本を知らなかった訳ではなかったものと思われる。

綾部移住後間もなく、次のようなエピソードがある。

「また大本では、神苑に配置して庭造りをするために近くの山から出た石や、近郷あるいは遠国からの石を送って来ることもあって、中には何千貫（千貫は約3.7トン）という大石もあった。

盛平がある時、ミロク殿の西門口まで来ると、作業中の一人が、『植芝さん、ちょうどよいところへ来てくれました。あなたのところへ今使いを出そうと思っていたところです。この石を持ち上げてくれませんか』というのであった。見ると千貫もありそうな大石である。それが底地にめりこんでいる。

『これはダメですよ。いくら力があってもムリですよ』と盛平が答えているところへ王仁三郎が出て来て、『植芝さん、これは言霊（原文は言魂）で力を出して動かさねばあきまへん』といった。『コトタマって何ですか』と聞くと、『この石を動かすには（註 動く、浮くの意を持つ言霊）やな、真気を集めて、ウの言霊を発して浮かせるんや』と言って、言霊の説明をした。

盛平は、『やってみましょう』ともろ肌をぬいで巨石に両手をあて、渾身の力をふりしぼり、『ウ……』の言霊を発すると、不思議や、巨石はむくむくと動いて、ほんの少し移動した。どんな強力でも、とても動かせまいと思われた巨石は言霊で動いたのである。自分の力量を知っている彼は、全く驚くべき奇跡を体験したのである。」（③ pp. 71-72）

確かに、開祖は綾部に来てから格段に強くなったという話が伝えられている。

「和歌山の田辺に、講道館が柔道を普及するためにつくった道場があった。そこを任されていた人物に鈴木新吾さんという方がいた。

実は植芝先生は、兵役を終えて大陸から帰ったあと、ここで鈴木さんに入門して柔道を習ったのだという。

私（藤平）が植芝先生のお供をしてこの田辺を訪れたときのことだ。鈴木さんが植芝先生と昔話を始められた。

『植芝先生は、私に入門したころは弱かったよね。いつかあなたくらいに強くなれるんだろうか、なんて私に聞いていたものね。熱心なのはいいけれど、藪に肥桶を隠して稽古にくるから臭くてね』先生は苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

あろうことか鈴木さんは、私の目の前で、植芝先生が『弱かった』と言われたのだ。今まで聞いていた話と全く違う事実、私は困ってしまった。

話はさらに、植芝先生の北海道の開拓時代に及び、武田惣角先生に大東流柔術を習ったいきさつにもふれられた。

（中略）

それでも先生は、なにしろあの武田惣角先生に習ったのだからずいぶんと強くなったはずだ。今度は負けないだろうと、田辺に帰ってきたときに再び鈴木さんに試合を申し込んだのだという。

鈴木さんはそのとき、柔道をやめて相撲をやっていた。

私（鈴木）は田舎相撲の大関ですよ、と言って、試合をしたらしい。

『あのときもダメだったよね。大東流を習ってきたから負けない、なんて言いながら、やっぱり弱かったよね。あのときは、先生、一ヵ月寝込んだね』

鈴木さんは笑いながら言う。植芝先生が鈴木さんを投げようと思った瞬間に、爪先でぽーんと飛ばされてしまったというのだ。しかも先生は、このとき腰を痛めて1ヵ月くらい寝込んだとまでいうのだ。

（中略）

『でも、先生、大本に行って修行して帰ってきたときには強くなっていたね。あのときに強くなったんだね』

鈴木さんによると、どうやら先生は綾部（京都府、大本教の本部）へ行ってから強くなったらしい。それも以前とは見違えるほど劇的に、だ。』（藤平光一著『中村天風と植芝盛平 氣の確立』）。

このようなエピソードは他にもある。

大先生の言霊の妙用は、出口王仁三郎聖師からのもので、大東流を習ったばかりの頃は力を抜くことだけの技であったので、柔道の有段者であった鈴木新吾氏に歯が立たなかったのだと思われる。この言霊の妙用（外形的ではない、内面的な技）を覚えてから、見違えるように強くなったのであろう。

綾部移住後3、4か月もたった頃、本宮山麓の住居の一部を改造して24畳敷ほどの「植芝塾」を開設して、大本関係者に武道（柔術、剣術）を教えるようになった。

ここでも、霊的な不思議な現象に出会っている。

大本では、第一次大本事件の後、1921年（大正10年）からであるが、鎮魂帰神は禁止されたが、大先生が満蒙に渡った時の次の写真から、鎮魂行（註 一種の観想法）は続けていたことが分かる。



鎮魂印を結ぶ大先生

言霊の妙用や鎮魂行によって、大先生に神通力が備わって来たと考えるべきかと思っている。

大本教信者である砂泊兼基著の『合氣道開祖 植芝盛平』では、次のように伝えている。

「北海道の原野に挑んで、見事開発をなしとげたが、なお物足りぬ心の糧を求めて大本に来て、まずやらねばならぬことは、朝夕の本部神殿においての礼拝である。それが終って、建設途中にある神苑内のすべての作業の奉仕である。その間、ひまを見ては膨大な（膨大な）大本の文献の探求である。言霊学、霊学、古典古書の研究など、普通では一生かかっても解明出来ない大事業である。それと幽斎（鎮魂帰神法など）の修行、これらのことを毎朝夕繰返し行なうのであった。」（③ pp. 57-58）

『霊界物語』の口述が 1921 年（大正 10 年）10 月 18 日に開始しているが、大先生も臨席した可能性がある。



霊界物語の口述は、床に横になって行われた。

そして、1921 年（大正 10 年）以前に、精神的には、真の武道を開眼していたと伝えられるので、この頃には鈴木氏の話しているように強くなっていたのであろう。

「人を助ける武道、人間社会に闘争をなくし、平和をもたらす武道、彼の目的とする真の武道は、このような至高の人類愛に燃えるものであった。彼の目指すのは、従来の武道の観念に打ち勝って、如何にして武術の武技を天地の理法に合うようにするかということである。そして彼は大正 10 年（38 歳）以前に、精神的には、真の武道を開眼していたのである。彼がその武技の姿、その性質の異なった武技の開発には、（綾部に移って来てから）数年の歳月を要しているのである。」（③ p. 62）

1921 年（大正 10 年）の第一次大本事件があって、1924 年（大正 13 年）2 月 13 日に保釈出獄中の出口王仁三郎聖師が世界統一宗教確立の志により満州、蒙古へ渡るようになった。この時の聖師の護衛を大先生が務めることになり、同行した。

満州や蒙古では、現地の人に合気柔術を教えたり中国武術を学んだりしたようである。

1924 年（大正 13 年）6 月 20 日にパインタラ（通遼）に到着した一行は、奉天軍に包囲され、武装解除させられた。そして、銃殺されることになったが、危機一髪の時に日本大使館に引き取られ、帰国した。

帰国して、再び綾部で武道と農耕生活に戻ったが、1925 年（大正 14 年）の春、自分自身が黄金体に化すという体験をした。

「たしか大正 14 年の春だったと思う。私が一人で庭を散歩していると、突然天地が動揺して、大地から黄金の気がふきあがり、私の身体をつつむと共に、私自身も黄金体と化したような感じがした。それと同時に、心身共に軽くなり、小鳥のささやきの意味もわかり、この宇宙を創造された神の心が、はっきり理解できるようになった。その瞬間、私は『武道の根源は、神の愛（万有愛護の精神）である』と悟り得て、法悦の涙がとめどなく頬を流れた。

その時以来、私は、この地球全体が我が家、日月星辰はことごとく我がものと感じるようになり、眼前の地位や、名誉や、財宝はもちろんのこと、強くなろうという執着も一切なくなった。」(⑥ pp. 17-18)

前述の砂泊兼基著の引用で、「大正 10 年（38 歳）以前に、精神的には、真の武道を開眼していたのである」とあったが、大先生の言葉から、エポックメイキング（epoch-making）となる実質的な開眼はこの 1925 年（大正 14 年）の春のことであったと考える方が無理がない。

1925 年（大正 14 年）12 月に、大先生の噂を聞きつけた竹下勇海軍大將が、上京を促し、翌年、単身上京して、山本権兵衛伯爵などの知遇を得ることになった。

ところが、内務省から大本との関わり合いについてクレームが出て、綾部に引き上げた。

1926 年（大正 15 年）には、再び竹下大將から懇請があり、上京し、遂に 1927 年（昭和 2 年）一家をあげて上京し、しばらく大本を離れることになった。

上京後、稽古場所を転々としていたが、1931 年（昭和 6 年）4 月には、牛込（現 新宿区若松町）に 80 畳の皇武館道場が完成し、本格的に活動を開始した。

1932 年（昭和 7 年）に、大本の昭和青年会で武道部を作る話が持ち上がり、指導を始めたが、出口王仁三郎聖師から単に昭和青年会の一部とするよりも会を組織して独立体にするよう話があり、大日本武道宣揚会が組織され、8 月 13 日に聖師が総裁、大先生が会長になって発足した。

「大日本武道宣揚会趣意書

真の武は神より来るものである。武は戈を止めしむる意であつて、破壊殺傷の術は真の武ではない。否斯かる破壊の術を滅ぼして、地上に神の御心を実現する破邪顕正の道こそ真の武である。

神国日本の武道は惟神（かんながら）の道こそ真の武道大道より発して皇道（神の道）を世界に実行する為に、大和魂を体に描き出したものである。徳川三百年、武士道（註 江戸時代は武士道のことを武道と呼んでいた）華かなりし時代は、既に真の武士道は失はれてゐたのであつて、むしろ真の武士道は言挙げせぬ神代に存在して居たのである。

今や天運循環、百度維新、東西古今の文物は翕然（きゅうぜん、多くのものが一つに集まり合うさま）として神洲帝国に糾合され、世界人は斉しく神機の大なる発動を待望して居る。而して此の混沌たる世界を救ふの道は唯日本固有の大精神たる皇道を天下に実行するの外無いのである。

吾が大日本武道は神の経緯、皇道の実現のために惟神の人体に表はされたるものであつて、蔵すれば武無きが如く、発すればよく万に当る兵法の極意を尽すものである。

昭和維新の大業は政治経済のみでもゆかず学術のみでもゆかず、又精神のみでも充分ではない。吾々は神より下されたる真正の大日本武道を天下に宣揚して此の大業成就の万分の一の働きを相共にさして頂きたいのである。神より発したものは神に帰る。

真の武は神国を守り、世界を安らげく、人類に平和を齎（もた）らすものである。

願はくは此の意を諒せられんことを。」（池田昭編『大本史料集成 運動編』 pp. 307-308）

1933 年（昭和 8 年）には、大日本武道宣揚会竹田道場も開設され、大本関係者のみならず広く一般の修行者及び武道家の修練の場として開放された。

1935 年（昭和 10 年）12 月 8 日に第二次大本事件が発生し、大先生も取り調べを受けることとなったが、大阪府警察本部長の富田健治氏などの計らいにより入獄を逃れ、釈放された。

大先生は、事件の法廷に現れたことがあったが、これ以来、大本との縁を切った（切らざるを得なかったというのが正しい）。そして、教団の信者としての活動はしなかった。

戦争が終わり、第二次大本事件の不敬罪も解消し解決した。

それ以降、次のような関わりがあった。

1950 年（昭和 25 年）5 月 6 日 亀岡の天恩郷を訪問、座談会

1954 年（昭和 29 年）4 月 4 日 亀岡の天恩郷を訪問、大本参議を拝命

1956 年（昭和 31 年）11 月 26 日 東京本苑（現 東京本部）で出口直日三代教主に面会

1958 年（昭和 33 年）4 月 30 日 東京本苑で参拝

1963 年（昭和 38 年）3 月 29 日 亀岡の天恩郷を訪問

1968 年（昭和 43 年） 東京本部に 6 回、亀岡の天恩郷に 1 回訪問

1969 年（昭和 44 年）1 月 17 日 出口直日三代教主に面会（東京）

2 月 7 日 東京本部で参拝

2 月 14 日 東京本部で参拝

第二次大本事件により、出口王仁三郎聖師との関係が途絶えた間、中西光雲・清雲夫妻との交流があり、最終的に合気道神学ともいうべき、合気道の概念がまとめられた。

「合気の植芝を導き 言霊研究にも着手

中西夫妻が修法研鑽に明け暮れていたときに出会ったのが、合気道の開祖・植芝盛平だった。

その出会いは、茨城県岩間町に住んでいた大本教信者・赤沢善三郎（原文の善五郎は誤り）という人物の仲介による。中西夫妻に心酔していた赤沢が、彼らの活動を植芝盛平に話したところ、植芝が非常に興味を持ち、昭和 12 年（1937 年）のある日、突然、東京・板橋の大山に住んでいた中西夫妻のもとを訪ねてきたのである。

ちなみに、植芝は大正 9 年（原文の 7 年は誤り）に大本教に帰依し、大正 13 年（原文の 14 年は誤り）には出口王仁三郎（おにさぶろう）の用心棒として王仁三郎と蒙古へ同行、パイントラ（中国名は内モンゴル自治区の通遼）で遭難し、あやうく救出される一幕もあった。帰国後、植芝は大本教団とは一線を画し、合気道の研鑽に努めていたのである。

植芝は中西夫妻に対して「合気道（理合としての「合気」でなかったか？ 合気道という流名は昭和 17 年大日本武徳会で付けられた）という気の原理を開眼するために指導を受けたい」と申し入れてきたという。

そのころ、中西夫妻は「日高の法伝（ほうでん）」のために奈良の葛城山で参籠修行しなければならなかったが、それを一時延期して、植芝のために合気道に関係する神々を降ろして秘伝を教授した。また、古来の武具のいわれや合気と気合の相違など、いろいろ伝授したという。

その後、太平洋戦争となり、昭和 16 年（12 月）に赤沢が中西夫妻を岩間町に招聘、夫妻はその地で翌年から本格的に『古事記』（ここにいう『古事記』とは、神より特別に清雲に下賜されたもので、正式名称は『布斗麻邇古事記伝』といわれるものである）をベースにした言霊の解明に挺身することになる。この研究は単に書斎的なものではなく、法座（人間の理性では解決できないような問題があれば、それを担当する神々に降臨を願い、その方法や教示を得るために行う修法）を立てて霊的に順次調べて解明していくという、神秘主義的なアプローチの異色のものだった。

具体的には、清雲が神憑りになって『古事記』の一字一句を口述、光雲がそれを書記するのである。一回で 2 時間から 3 時間かかるが、それを毎日、3、4 回も繰り返すのである。

『古事記』の解明のために清雲に神懸った担当の神は、常陸言代主命（ひたちことしろぬしのみこと）。その前身は、岩間の愛宕山の十三天狗のひとりであった。

『古事記』の言霊研究は、戦後の昭和 23 年（中西清雲のプロフィールでは 22 年）まで続けられた。さらに各種の祝詞や大祓の言霊の解明なども行った。

その詳細は第 4 章（p.184）に譲るが、この言霊研究によって、神界・法界・霊界の隠身（かくりみ）の世界が開示されることになった。

清雲と光雲はこうした研究のほか、さまざまな霊的活動にも邁進した。たとえば、昭和 40 年より 43 年にかけては、光雲が本殿造営会長として四日市市の椿神社（正式には椿大神社）本殿造営に尽力した。

中西夫妻が椿神社を造営したのは、『古事記』の解明により猿田毘古神社とするのが目的であったが、残念なことにそのときの誓約は実行されずにいる。

清雲らが四日市市に住むようになったのは、当初はこの神社の運営と研究が目的のひとつであった。

その光雲は、御遷宮をすませたのを見届けるかのように、翌昭和 44 年 3 月 26 日に埼玉県で他界する。

光雲亡きあとも清雲は、邇岐志（にぎし）殿において、言霊に関する研究はもとより、神霊研究を精力的に重ね、前人未到の地平を開くにいたっている。」（⑭ p. 179）

『古事記』の解説に挑戦した清雲たち

合気道開祖・植芝盛平は、かつて次のように話したことがある。

「京都の綾部にいたころ、出口王仁三郎聖師は、必ずこれより先、言霊で『古事記』を解明する者が現れるとしきりにいっておりました。今にして思えば、それは先生がたのことだと思います」

植芝のいう「先生がた」とは、中西清雲と光雲に他ならない。それにしても『古事記』を言霊で読み解くとは、どういうことか。

周知のように『古事記』は、和銅5年(712)、稗田阿礼が神憑りで口述、審判(さにわ)役の学者・太安万侶が筆録したとされる歴史書である。

同時に『古事記』は、神道の惟神(かむながら)の道が示された神書(しんしょ)でもあるが、王仁三郎は『古事記』こそ神道霊学の奥義書であるとしていた。

王仁三郎に限らず古神道関係者には、『古事記』を宇宙の謎が秘められた予言書とか、最高の秘義書とみる向きが少なくない。

つまり『古事記』に秘められた真意を読み解くことにより、神界から霊界、現界にいたるまでの霊妙な仕組みを明らかにすることができるというのだ。

単なる歴史書でなく、本当の意味での秘義書—それが『古事記』なのである。

この『古事記』は、上・中・下巻から成る。上巻は神代について記述し、中下巻は歴史的な天皇の事蹟や系譜を軸として展開する。清雲と光雲が言霊によって解読したのは、上巻であった。

『古事記』では、この上巻の記述がもっとも謎に満ちて神秘的な要素が多い。ふたりはその謎を解くべく、果敢に挑戦した。

清雲が上巻の一言一句を神憑りになって口述し、それを光雲が審判しながら書き留めたが、それはまるで稗田阿礼と太安万侶が、それぞれ清雲と光雲に化身したかのようであったともいう。

滔々と後述する清雲に対座して、光雲はほとんど速記状態で筆録した。光雲の一日平均の筆録は2万字から3万字で、400次詰め原稿用紙にして50枚から70枚にも及ぶ膨大なものであった。

しかも、光雲はそれをさらに厳密に審判していくため、『古事記』原文の1ページ分の解読作業は1か月を要したという。

いずれにせよ、食事と就寝時間を除いて、ほとんど口述筆記にかかりきりだった。

このようにして『古事記』上巻の解明作業は、昭和16年から同23年(中西清雲のプロフィールでは昭和17年から22年。夫妻は、昭和16年暮れに岩間へ移住)まで費やして完成したが、光雲が用いたノートはすべて植芝盛平の寄贈になるものだった。

当時の時局では物資が乏しく、膨大な冊数のノートを入手するのは困難をきわめた。しかし、植芝は万難を排してノートを確保し、提供したのである。中西夫妻の言霊解明にかける植芝の期待が、いかに大きかったかがうかがわれるのではないか。」(⑭ p. 184)

中西光雲・清雲夫妻を通して「武産合気の神示」が降ろされたが、これに関連してまとめられた概念で主要なものが「宇内三元の法則」であろう。この法則は、「結び」と「合気道の技の組み立て」についてまとめられている。「法則」であるから、「真の合気の道」の「真(宇宙の真理)」のことを指している。

「すでに述べた岩間における三大念願のうち、第一の合気神社建立は、神殿だけは先述したように、松本宮大工の手によって昭和十九年(註 由来記では十八年)晩秋には完成をみていた。祀るべき四十三守護神の修祓(しゅばつ)の儀は、前章で記述したごとく昭和十五年十二月いちはやく済まされてあった。

あとの本格的な神域づくりは、開祖独自の言霊的発想に準拠しておこなわれた。

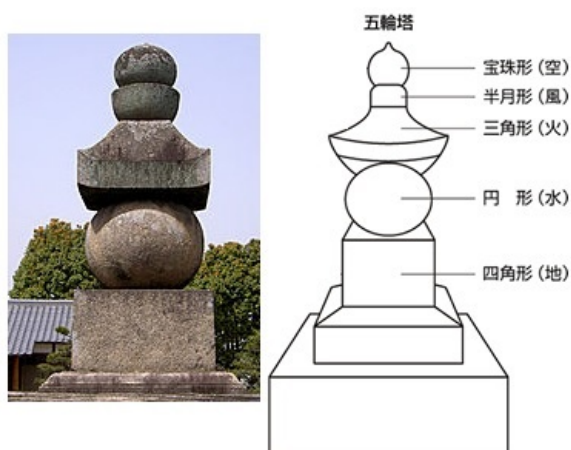
たとえば本殿、拝殿、鳥居その他の配置はすべて宇内(原文は宇大だが宇宙のことは宇内と書く)三元の法則の形象化と称される『△(イクムスビ)』『○(タルムスビ)』『□(タマツメムスビ)』にしたがっている。この俗にいえば『三角』『丸』『四角』の形象は、言霊学における呼吸図にかかわるもののようであるが、開祖はよく「△○□が一体化してとなり、それが気の流れとともに円転してスミキルのが合気道

じゃ」などと説述していたものである。」(④ p. 206)

宇内三元の法則

△	○	□	出典
生産霊	足産霊	玉留産霊	⑥ 88 ⑦ 112
物質的： 天(理)・火(法)	水(礼)	地(天の御稜威の現われ出る 処)	⑥ 36-38、90 ※1
精神的(四魂)： 奇魂(理)・荒魂(法) 智 ・ 勇	和魂(礼、和合) 親	幸魂(慈愛) 愛	⑥ 36、37
気体・液体	柔体	固体	⑥ 149
気(言霊)を起こして、 流(動物の本性)	気によって活動： 柔(植物の本性)	気によって活動： 剛(鉱物の本性)	⑥ 32、161
梅(造化の三神)	松(裏表はない) 勝速日 ?	竹？	⑥ 37、⑦ 93
梅(造化の三神)	竹？	松(裏表のない教え) 勝速日	⑦ 21、22 ⑦ 21
気にして力を生じ、三 角体は破れざる姿勢を 具備 —入身一足の理—	精神の安静と魂を養 い、円熟万技を生む —円転の理—	体の千変万化を出し、表観は 千差万別運化を意味す —固成の理—	⑦ 52 「もちろんの法則」
未来 ?	現在 ?	過去 ?	⑥ 88

※1 「△：火、○：水、□：地」は五輪塔から。



「もちろん」「もちろん」とは、「真理・原理・道理」、「気体・液体・固体」、「使命・生命・宿命」、「魂・命・霊」、「頭・胸・腹」等の如く、三種(みくさ)を図鑑に表はしたものの、即ち○△□(もちろん、この形象全体を指すので△○□でも「もちろん」)の事であり、淤能基呂島(おのごろじま) 森羅万象万有の造化の元素原理より、生成発展の体用まで一切凡てが、この「もちろん」に包含されるものなのである。

神道に於ては、ひふみ祝詞(のりと)に「もちろん」という詞があり、仏教に於ては形として取入れ、譬へば位のあった人の墓などに、其の人が生前人間として為すべき、最高最善を仕尽上げたと云ふ意味を表徴

して、△○□の形 所謂「もちろ」の墓（五輪塔）を建立して居る様である。然し現在迄神道にせよ、仏教にせよ何れも其の意味の解らぬ儘に、宣（のり）上げたり象（かたどり）を伝承して来たに過ぎない。一切万有の造化生出は、気体より液体・液体より固体に、真理・原理・道理に基いて行はれ又死滅は其の反対の順序を以て執行はれる。例へばH₂Oに依て表はされる水も、水蒸気と云ふ気体から液体の水となり、この液体の自ら氷と云ふ固体になる。又氷が変化するときも、之の逆の順序に従つて行はるる如く、本体は一つであるが時に従ひ巡りに合はせて、経巡りつゝ体・用を変化してゆく、其の造化の元素原理の象（かたどり）を云ふ。又此際厳密に言ふなれば、この気体も更に気体・液体・固体に、液体も気体・液体・固体に、固体も亦気体・液体・固体に分れる事となる。従つて少くも現代の人文科学は液体迄の科学であつて、気体の科学は神霊化学に属すると云ふ事になる。

大神はこの「もちろ」を三種の神器として物の具に象徴された。即ち△一劔・○一玉・□一鏡である。そして是を以て人文々化の向上発展の土台と様に示された。何処の神社に於ても神前に三種の神器を奉置して居る所以である。」(⑬ p. 223)

注解 「もちろ」の形象（図鑑）は△○□（○△□など順序に関わらず）で、この形象全体で「もちろ」と読む。したがって、△が「も」・○が「ち」・□が「ろ」というような読み方はしない。ひふみ祝詞の「もちろ」であるから、天（あめ）の数歌（『霊界物語』73-1-10）の「もも・ち・よろず（百千万）」のことである。宇宙の森羅万象（よろずのもの、あらゆるもの）を表す基本図形であり、合気道の体（本体）と用（働き）を表す形象である。

合気道の動き（用）では、「三角（△）に入り身し、丸（○）く捌いて、四角（□）に納める。」である。

中西光雲・清雲夫妻と大先生は親しくしていたが、神事のやり方で齟齬が生じ、疎遠になってしまったので、あまり詳しい情報が遺されていない。思うに、大先生は大本式の神事にこだわり、中西夫妻は修験道（密教系）を基礎にした神事形式であったので、相容れなかったのであろう。

参考文献・資料：

- ① 植芝吉祥丸著『合気道』1957年
- ② 植芝吉祥丸著『合気道技法』1962年
- ③ 砂泊兼基著『合気道開祖 植芝盛平（『武の真人』と改題）』1969年
- ④ 植芝吉祥丸編著『合気道開祖 植芝盛平伝』1977年、1999年改訂（引用は改訂版による）
- ⑤ 植芝吉祥丸編『合気道開祖―植芝盛平生誕百年』1983年
- ⑥ 高橋英雄編著『武産合氣』1986年、2016年（21版、引用は21版による）
- ⑦ 植芝吉祥丸監修『合気神髄』1990年
- ⑧ 砂泊誠秀著『合気道で悟る』2002年
- ⑨ 合気ニュース編『植芝盛平と合気道Ⅰ』『植芝盛平と合気道Ⅱ』2006年
- ⑩ 合気会編『合気道本部道場創建 80 周年 合気会財団法人設立認可 70 周年 合気道・合気会の歩み』2012年
- ⑪ 大本教学研鑽所編『抄録 大本と植芝盛平翁（「合気道」創始者）』2015年
- ⑫ 出口王仁三郎口述『霊界物語』1921年 - 1934年 <http://reikaimonogatari.net/> <http://onidb.info/>
- ⑬ 中西光雲著『「ことたま」に依る とくさのおおはらい ふるべのはらい 十種太祓（布留部祓）の解明』1970年
- ⑭ 月刊『ムー』「古神道を現代に甦らせる中西清雲」1997年4月号, pp.174-187

- ⑮ 合気ニュース『合気道百科』1987年
- ⑯ 植芝守高（盛平）著『武道練習』1919年
- ⑰ 植芝守高（盛平）著『武道』1938年

参考：

千葉 周作（江戸時代の剣術の流派「北辰一刀流」の創始者）

上達の場合に至るに二道あり、
理（ことわり）より入るものあり、業（わざ）より入るものあり、
いずれより入るもよしといえども、
理より入るものは上達早く、業より入るものは、上達遅し、

何となれば、理より入るものは、例えば向こう斯様（かよう）するときには斯く（かく）せん、
斯くせんときにはは斯様せん、斯く成りたるときには如何せんと、
その理を様々に考え、工夫をこらして稽古するをいう。

業より入るものは、左様の考えもなく、必死に骨折り、散々に打たれ突かれして後、
妙所を覚えること故、上達の場合に至るには大いに遅速あり、
故に理を味わい考えては稽古をなし、稽古をなしては理を考え、必死に修行すべし。

理業は車の両輪のごとし、故に理業兼備の修行、日夜怠慢なければ、十年の修行は、
五年にて終わり、上手名人の場合に至るべし。

（文責：八千代合気会 乾泰夫）

付表 1. 開祖が使われた用語の意味

	用語	意味
ア	アカタマ シロタマ マスミ タマ アオタマ 赤玉、白玉、真澄の玉(青玉)	玉はことだま（エネルギー、気、波動、響き）。 「赤珠白珠とは・・・妙精の現われにして、ことだまの妙用です。」（開祖） 赤玉は潮満つ玉（陽）、白玉は潮干る玉（陰）、即ち陰陽が和合した状態、体よりも気で「来たれば即ち迎え、去れば即ち送り、対すれば即ち和す。五五の十 二八の十 一九の十 是を以て和すべし」の状態。 真澄の玉（青玉）は風の玉、空気の素みたいなもの、即ち「真空の気と空の気がむすんだもの」。スミキリの状態。 赤玉＝「蜂・天を飛ぶ蟲（陽）・の霊出（ひで）」、白玉＝「蛇（おろち）・地を這う蟲（陰）・の霊出」、真澄の玉＝「魂（たま）の霊出」。 山幸彦、海幸彦の神話で、山幸彦が海神（わたつみ）からもらった塩盈珠（しおみつのたま）・塩涸珠（しおひるのたま）が赤玉・白玉。巖の御魂、瑞の御魂参照。 真澄の玉は、金剛不壊の珠（金剛不壊の如意宝珠）、八光の珠。
	あなないの ^{ミチ} 道	武産合気の道。 「あなない」は、三五（十五で満月と同じ、欠けたところがない）、麻柱とも書く。穴ない（欠点がない）の意で、「あなないの道」は「神の業」。
	アマツカナギ 天津金木	布斗麻邇と同じ働きで、森羅万象を読み解くための宝器の一つ。金木は神算木とも書く。大石凝真素美著『天津神算木之極典』あり。 「延喜式祝詞」に「天津金木を本（もと）打切り末打ち断ちて千座（ちくら）の置座（おきくら）に置き足らはして」記されている。天津は神のとか神聖なという意、金木は細い木のことをいう。万有を構成する要素である天・地・火・水を象徴する天津金木（檜で作られた四分角二寸の角柱）を操作することによって、天地開闢の有様、生成化育する宇宙の様相、宇宙に働く根本玄理、また森羅万象、人事百般およそ分からないことはないといわれる。（『古神道・神道の謎』『古神道の本』）
	アメ ウキハシ 天の浮橋	水火の精台。水精火台。天台。天の浮島（中津國）。 「天の浮橋は、水（身、み、体）火（霊、ひ、心）と結んでめぐるといこと。火は水を動かし、水は火によって動かさる。水も火も一つのものである。螺旋状にめぐる。気をもって絡むのである。それは、息によるものであり、この息が合気である。」 「火（横）と水（縦）が和合して活動する姿、火と水が相和している姿をいう。」 「天の浮橋に立つ時、魂に宇宙の妙精を悉く吸収するのです。天之御中主神となって立つのですよ。一つ礼拝するのにも宇宙に礼拝するのです。そして天の中心に同化してゆくのです。」（開祖） 「天の浮橋」は、伊耶那岐（いざなぎ）、伊耶那美（いざなみ）の両祖神が国産みの際に立たれた天上の橋。また、天孫降臨の折、猿田彦命が案内して通った天と地を繋ぐ橋。【記紀】

	アマ トリブネ 天の鳥船	亦の名は鳥の石楠船の神（とりのいわくすふねのかみ）。『旧事本紀（くじほんぎ）』には天磐船（あめのいわふね）とあり、鳥のように軽快で堅固な楠造りの船のこと。饒速日尊（にぎはやひのみこと）の乗り物。合気道の「天の鳥船の行（船漕ぎ運動）」は、この神事に由来した禊行。神道家の川面凡児（かわつらぼんじ）の禊流神伝を参考にして取り入れたもので、動的鎮魂法の1つ。宇宙の波動に共振し、靈感を高め、気を強める行。
	アワジ ノ ホ ノ サワケ ギョウ 淡道之穂之狭別の 行	「淡道之穂之狭別」の名義は「淡道島（あわじしま）の粟の初穂の男子」。淡道之穂之狭別がイザナギ・イザナミ二神の国生みによって生まれた最初の島の名であることから、淡道之穂之狭別の行は天の浮橋に立つて行う国生み、島生み（創造）の結びの」業のこと。即ち「武産合気」。
イ	イ キ セイダイ 水火の精台	水精火台、天の浮橋、天台。 読みは「すいかのせいだい」かも知れない。
	イズ ミズ 厳、瑞	厳は、火の系統で稜威（いずいず）しき御魂。瑞は、水の系統で円満美麗にして瑞々（みずみず）しい御魂。厳は陽、瑞は陰。大本では五男神を五（いつ、いづ）、三女神を三（みつ、みず）ともいう。
	イズ ミタマ ミズ ミタマ 厳の御魂、瑞の御魂	塩盈珠（しおみつのたま）、塩涸珠（しおひるのたま）。 「潮満の珠はまた厳の御魂といふ。いづとは泉のいづの意であつて、泉のごとく清鮮なる神水の無限に湧出する宝玉である。これをまたヨハネの御魂といふ。つぎに潮干の珠はこれを瑞の御魂といひ、またキリストの御魂といふ。みづの御魂はみいづの御魂の意である。みいづの御魂は無限に火の活動を万有に発射し、世界を清むるの活用である。要するに水の動くは火の御魂があるゆゑであり、また火の燃ゆるは水の精魂があるからである。しかして火は天にして水は地である。」（霊界物語 01-4-35）
	イチレイシコン 一霊四魂	宇宙の三大元質（「霊」「力」「体」）の一つである「霊」を一霊四魂に分ける。一霊は神の直授の霊魂で、直霊（なおひ）といい、その働きを荒魂（あらみたま、勇）、和魂（にぎみたま、親）、幸魂（さちみたま、愛）、奇魂（くしみたま、智）の四魂に分ける。
	イツトモノオ オヂカラ 五伴緒の緒力	天孫降臨の折、邇邇芸（ににぎ）命のにつき従った五神、即ち天兒屋（あめのこやね）命、布刀玉（ふとだま）命、天宇受賣（あめのうずめ）命、伊斯許理度賣（いしこりどめ）命、玉祖（たまのおや）命の身体内部に働く、目に見えない力、即ち「気の力」。
	インリョク レンマ 引 力の錬磨	「万（よろず）和合の力」即ち「相手の気が流れ込んで、真空の気と空の気がむすび立つ力」を磨くこと。腹中（皆空の中心）に相手を吸収して自分に同化してしまう鍛錬。引力の鍛錬。 引力の主体たる自分が権威と力を増す（人格完成）という合気道の鍛錬も指す。 「真の武とは相手の全貌を吸収してしまう引力の錬磨である。」（開祖）
ウ	ウケヒ 受霊	合気道の技（立技呼吸法など）で、掌を上に向けて相手を導くことを受霊で導くという。

		「その大神の使命の受霊をもって、世に立たして使命の上に振り立つ時は、神がその身に仕組みしてゆくのであります。」（開祖） 太陽の光、月の光、星の光を受けることを「誓（うけひ）」といますが、同時に「受霊」ともいい、大宇宙の大霊（魂命霊気）の仕組みが、人間の四魂のなかに宿っているのです・・・神から使命をくだされ、その使命を自ら悟り、自覚する時に神の気を受けます。この気が△です。その気を受けることによって、それが○となり、生命誕生になります。生きていることは体内に血液が流れていることです。これは神から「受気霊（うけひ）」したということです。（『神道気学宝典』）
	ウチュウ サンダイゲンシツ 宇宙の三大元質	霊、力、体のことで、その本源は神である。即ち神は霊、力、体の総本体である。 霊（ち。「ひ」ともいう）と体（からたま、空魂）の二元が結合して力（ちから）となる。
	ウチュウ シンショウ 宇宙の真象	宇宙の真相、宇宙の真理、宇宙の条理、宇宙根元のいわれ、万有万神の条理、大御親の真相、天地の真象、天地の真理。 物事の正体（真の姿）という意味から、この「象」を使っている。 「宇」は空間全体（天地）、「宙」は時間全体（過去・現在・未来）を意味する。
	ウチュウ ミョウセイ 宇宙の妙精	宇宙の霊妙なる精、即ち「気」のこと。
オ	オ ド カムワザ 小門の神業	禊（みそぎ）の業のこと、即ち宇宙を浄める合気道のこと。 伊佐那岐命（いざなぎのみこと）は、黄泉国（よみのくに、根の国、死の国）の兵士に追いかけられ、黄泉比良坂（よもつひらさか）まで逃げ、三つの桃の実をお投げになって、追い払われた。三つの桃の実とは、生命の木の実で、魔よけの力がある実である。死の国にて穢れた体を浄めるために、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原（あはきはら）にて禊祓えをされた。
	オ ノ コ ロ ジマ 淤能基呂島	地球。 川面凡児も、自転（おのころ）島、即ち「地球」と言っている。 国産み神話では、瀬戸内海の沼島（ぬしま）など複数の候補地がある。 「このクラゲのように漂える島々を修め固めよ」との天津神（あまつかみ）の命により、イザナギ、イザナミの二神が天の浮橋から天沼矛（あまのぬぼこ）を指し降ろしてかきまわし、引き上げたその矛先から滴り落ちる潮が、おのずから固まってできた島がオノコロ島である。
カ	カ ゲン ミ 過現未	過去・現在・未来。 「人間の生命も始めなく終わりなく、過現未を一貫して生き通しているのであります。」（開祖）
	カ ミ イ キ 火水と水火	「火水（かみ）というのは体（物事を中心、本体）であり、水火（いき）とは用（働き）であります。」（開祖）
キ	キ ミョウヨウ 気の妙用	言霊の妙用。 愛の気（愛の言霊）の霊妙なる働き。呼吸力。

	キ ム ス イ ク ム ス フ ク ム ス 気結び、生結び、和久結び、 ホ ム ス 穂結び	気結びは気（イメージ）だけで相手と結ぶこと。生結びは気と体とで相手と結ぶこと。和久結びは大勢の相手と結ぶこと。穂結びは結びによって技が湧き出るようになること。 「此の現世の凡ての事毎は、皆神と一切万有及万有相互間の気結・生結・和久結が本となつて営（いとな）まれてゐる。 例へば茲に一組の男女が居る、互に好意を持合ふ、是が気結（気だけの結）である。次に具体的に家庭生活を営む、是が生結（心と物の結合ひ・価値ある使命の結）である。其の結果子供が生れ、其の子供と親とが夫々に、生きる価値を持寄り一致協力して一家を形成し、勲（いさほし）・誉（ほまれ）を仕上げ掲（かか）げて、国家社会に貢献（こうけん）する活躍活動をなしてゆく。是が和久結（凡てを綴り・繋ぎ・包み・大調和の丸き玉の巡りとなす、即ち全人類を総合調和する理性理想の平和（などり）に結ぶ八紘一字の大倭（おおやまと）現国玉（うつしくにだま）の結の意）である。従つて其の意義は其の場合＼／に应じて如何程（いくら）でも大きくも、小さくなるのである。 此場合夫婦の間に子供等が生れ、其の子供等が又夫々親となつて、沢山の孫等が生れる。斯様に次々と横の結を以て、弥栄に殖（ふ）え・増（ま）し・稔る結を穂結と云ふ。即ち天と地・淤能碁呂島と万有・陰と陽・左と右、凡て函蓋相応して和する、花と実と種の造化の顕現の結の意を云ふ。」（中西光雲の言霊による解）
ケ	ケンサイ ユウサイ 顕斎、幽斎	顕斎は、宮、社、祝詞、供物、御幣（みてくら）が有つて、天津神、国津神、八百万の神々を祭る祭祀（儀式）、幽斎は、靈魂を以て祈り奉る道。 鎮魂の行も幽斎修行。
	ケンユウシン サンガイ 顕幽神の三界	顕界（けんかい、現象界、肉体・物質として現れている物の世界）、幽界（ゆうかい、目に見えない世界又は人間の潜在意識）、神界（しんかい、天界、魂の世界又は怒り・憎しみ・妬みのない最も純粋なエネルギー）。顕幽神三界の統一とは、顕（行動、体）、幽（感情、心、心霊）、神（思考、気、神霊）の三つが最高に調和した状態をさし、また、そのような状態により、見える世界、見えない世界及び神の世界を整える意味ととることができる。 大本では、霊界には神界と幽界があつて、神界は正しき神々や正しき人々の靈魂の安住所で、幽界は邪神の集まる所であり、悪罪者の靈魂の堕ち行く所と教えている。 開祖は、顕界・幽界・神界を三千世界と言ひ、幽界を仏教の世界と言っていることもある。
コ	コトダマ 言霊	霊の働き。宇宙創造、万物の生成化育は言霊の力による。 「宇宙は言霊の働きによってできた。初発（はじめ）は 75 声（50 音に濁音、半濁音を加えた音） の中心のス（主）声で、全てはこれから生み出されたとされる。言霊とは、言葉に靈威があるということで、善い言葉を発すればその言葉どおりに善い事が現れ、悪い言葉だとその逆になるという信仰に基づいている。キリスト教の「すべてのもの

		はこれ（言葉）によってできた」という教えやギリシア哲学のロゴスという考え方と通ずる。」（大本言霊学） 「宇宙の大元霊は唯一絶対の神であり『主（ス）神』または『主（ス）の神』ともとなえる。大元霊のはたらきは火（霊）と水（体）とにわかれ、その本体を火水（カミ、神、霊）といい、水火のはたらき（用）を水火（イキ、息、生命のあらわれ）という。イキによって言霊を生じ、言霊によってさらに霊の動き、はたらきがあらわれる。霊のはたらき、すなわち言霊である。・・・また言霊学（げんれいがく）的にいえば、言霊の神力によって宇宙は創造せられ、万物は生成化育しているということになる。」（大本七十年史） 開祖が言霊学を学んだ出口王仁三郎は、本田親徳（ちかあつ）と大石凝真素美（おおいしごり ますみ）の影響を受けている。本田は、本居宣長の門人、平田篤胤（あつたね）の影響を受け、大石凝は、中村孝道の「七十五声は即ち天地の声」説に山口志道の「天地の水火（かみ）と人の水火（いき）は同一」という象徴図形・火凝霊（かごたま）を加えて自らの言霊思想を打ち立てた。平田は、もともと多神教的、現世的な神道に、一神教的、未来教的性質を持ち込み、日本の神を世界の太宗とする信念を確立した。平田の言霊学はウ声を根本とするが、中村はス声に着目している。大石凝は、75 声を十八稜図に表し、ス声とマルチョン（○にㄣ「ポチ」）を中心に置いた。 開祖は、言霊は一音多義【例：ヒは一、火、日、霊】であるという流れなので、同じ言葉に多くの重層した意味がある。そのためか、『古事記』には 12 通りの読み方がある』『霊界物語』は、36 通りの読み方がある」（出口王仁三郎）と言われている。
	コトダマ ミョウヨウ 言霊の妙用	言霊のすぐれた働き。気の妙用ともいう。創造の力のすぐれた働き。呼吸力。 開祖は、言霊にはひびきがあり、働きがあるとし、この働きによって宇宙ができた説明している。 「言霊の妙用は一霊四魂三元八力の分霊分身である。」（開祖） 造化三神の御稜威を表す天（あめ）の数歌という神詞（かみごと）即ち言霊【ひと（一霊四魂）、ふた（八力）、み（三元）、よ（世）、いつ（出）、むゆ（燃）、なな（地成）、弥（や）、凝（ここの）、足（たり）、諸（もも）、血（ち）、夜出（よろづ）】を唱えることで、創造の力を得ることができる。 一～十は天地創造の七日間を、百千万（もも、ち、よろず）は造化三神を示している。 一（一霊四魂）：大宇宙の根源に大元霊があり、一霊のもとに勇親愛智の四魂を統べておられる。 二（八力）：真神のいとなみである陰陽二元の組み合わせによって八力が生ずる。 三（三元）：八力の複雑微妙な結合により、剛・柔・流の三元が出来る。 四（世）：遂に泥海のような世界が出来る。

		五（出）：日月星辰や大地が現れる。 六（燃・萌）：草木をはじめ諸生物が萌え出でる。 七（地成）：人類が生まれ、地上の世界が成就する。 八（弥）：その世界がますます発展する。 九（凝）：充実安定を表す。 十（足）：完成の域に達する。
	コンゴウ フ エ タマ 金剛不壊の珠	真澄の玉、青玉。金剛不壊の如意宝珠 ダイヤモンドのように透明で、空の気（物の気）を解脱して自由自在に動くタマ（かたまり）。如意宝珠は、円転滑脱、些かの障碍もなく、自由自在に転ぶ玉。
	コン キ ハク キ 魂の気、魄の気	魂の気は真空の気、魄の気は空の気。 「魂の気というのは、宇宙組織の気である。造り主の事である。」「魄は物の霊を魄という、宇宙組織のタマのひびきが魂である。」（開祖） 中国の道教では、魂は精神を支える気、魄は肉体を支える気。
	コン ヒレフ 魂の比礼振り	空の気を解脱して、真空の気に結んだ技。 「魂の比礼振りは、あらゆる技を生み出す中心である。その比礼振りは融通無碍で、固定したものではなく、臨機応変、自由自在の技である。」 「空の気は引力を与える縄であります。自由はこの重い空の気を解脱せねばなりません。これを解脱して真空の気に結べば技が出ます。」（開祖） 上代、主に女性が首から肩にかけて長く垂らした薄い白い布を比礼（領巾、肩巾、ヒラヒラするものの総称）といい、呪力を持つと考えられ、魔よけのために振った。 「邪心をはらい清めた精神状態」と説明されているが、それよりも動きがある、真空の気と空の気の結びによる自由自在の技と考える。
サ	サンゲン 三元	宇宙の三大元質（「霊」「力」「体」）の一つ「体」を三元に分ける。剛（ごう、鉱物の本質）、柔（じゅう、植物の本質）、流（りゅう、動物の本質）となる。剛（玉留産霊の神、□）、柔（足産霊の神、○）、流（生産霊の神、△）。 「生産霊、足産霊、玉留産霊の三元がととのうと、宇宙全体の姿が出来上がるのである。」（開祖）は、宇宙の基本的象形（△○□）を指す。
シ	シコン 四魂	荒魂（あらみたま、神の勇）、和魂（にぎみたま、神の親）、幸魂（さちみたま、神の愛）、奇魂（くしみたま、神の智）で、魂（みたま）にはそれぞれ裏表があつて、 良い方は 荒魂 「進展力」 <進・果・奮・勉・克> 和魂 「親和力」 <平・交・修・斎・治> 幸魂 「生成化育」 <益・造・生・化・育> 奇魂 「観察力」 <巧・感・悟・覚・察> 悪い方は 荒魂 <争> 和魂 <悪>

		幸魂 <逆> 奇魂 <狂> になる。 荒魂：恥づること、知らずば人は争ひて、獣に近き挙動なすなり 和魂：よし人に、親しむとても悔いること、知らずばつひに、人に悪（にく）まる 幸魂：人を愛で、いつくしむとも天地に、畏るるなくば、道に逆らふ 奇魂：もの学び、智慧を研くはよけれども、覚りなくば、狂ひこそすれ（出口王仁三郎）
	シダイ 四大	四魂（しこん、精神）に対比した物質（又は働き）で、奇魂（くしみたま）に対して『天』、荒魂（あらみたま）に対して『火』、和魂（にぎみたま）に対して『水』、幸魂（さちみたま）に対して『地』。
	シュウリコ セイ 修理 固成	修め作り、固めて完成すること。国産みの神事によるが、人格形成を通した地上天国作り。 「すりこせい」とも読む。
	シンクウ キ クウ キ 真空の気、空の気	宇宙に充滿している根元の気（宇宙の響き）を真空の気、五体が崩れないように保っている気を空の気。 真空の気を魂の気、空の気を魄の気。
	シンジンゴウイツ 神人合一	天人合一。霊肉一体の至上境。 心と肉体とそれを結ぶ気の三つが完全に宇宙の法則と一致すること。 「我即宇宙」の境地に至ること。 「合気道の極意は、己を宇宙の動きと調和させ、己を宇宙そのものと一致させることにある。」「修業は、神人合一を目標とするものなり。」（開祖）
ス	スイセイカダイ 水精火台	水火の精台、天の浮橋、天台。
セ	セイシン レイ カガク 精神（霊）科学	物質科学に対して、心、霊、気に関する科学。宇宙の真象、人間の本質（真の自分、真我）とは何かを考える哲学、又は宗教。 中西光雲は「神霊化学」という語を使っている。
	セイセイカイク 生成化育	万物を生み育てる神の働き。変化、成長する宇宙本来の姿。 「宇宙の運行は、すべて大いなる進展主義である。」（開祖）
ソ	ソクイ 続飯づけ（即位づけ）	飯粒を練って作った糊（続飯）で貼り付けられたように相手が動けなくなる技。 「人を中心にして円を描く。この円内がその人の力の及ぶ範囲なんです。いくら力のある人でもこの円の外には力が行かない。無力なんです。だから相手をこの円の外において押さえれば、人差し指でも小指でも押さえることができる。相手はすでに無力になっているのですから。」（開祖）
タ	タカアマハラ 高天原	人体（小宇宙）に対する全大宇宙。 「人間は宇宙の縮図であつて天地の移写である。故に人体一切の組織と活用が判れば、宇宙の真相が明瞭になつて来る。」（霊界物語 04-9-50）

	タケムス 武産	武の練磨によって心に生命力をつけ、その生命力が宇宙万有の生命力と相和して万物を生産するとする哲理で、武の阿吽（あうん）の呼吸（呼吸力）、すなわち陰と陽、霊（ち）と体（から）などが相互に作用し、結び合って、魂の技を生み出す道。 中西光雲は「さむはら」と同じ意味で使っている。「さむ」は開いて結ぶ、「はら」は孕（はら）んで結ぶ意としており、相手を腹中に吸収し（孕んで結ぶ）、一体となって（開いて結ぶ）動けば、導即倒で無限に技が生れる状態を指す。
	タマ オ 魂の緒	珠の緒。玉の緒。 肉体と魂を結ぶ紐のようなもの。魂と宇宙（神）を結ぶ紐でもある。
チ	チ ギ イワサカ ヒモロギ チ バ 地祇、磐境、神籬、地場	地祇は、祝詞に「地祇は高山の末・短山（ひきやま）の末に上り坐して」とあり、天津神に対して国津神、日本の国土に土着する神。地神。 磐境は「磐座（いわくら）」と同じと考えてよく、神の依代（よりしろ、宿る物）となる岩や区域。磐は強固の意。 神籬は、神の依代となる山・森・老木などの周囲に榊などの常緑樹を巡らし、玉垣を結って神聖を保ったところ。 地場は、神が宿り動いて和し結んで栄える場所（癒しろ地）の意か？『ひふみ神示』に「丹波はタニハ（丹田）、タニハとは日の本の国ぞ、世界の事ぞ、丹波とはタンバイチとは世界の中心と云ふ事ぞ、日の本と云ふ事ぞ、キミの国ぞぞ、扶桑の国（不老長寿の国即ち日本）ぞぞ、地場ぞぞ、判りたか。地場を固めなならんぞ」とある。 開祖は、これらを同じ「神の生き宮」という意味で使っている。
	チヨクセツナイリュウ カンセツナイリュウ 直接内流、間接内流	直接内流は、素盞鳴尊や国常立尊など、直接大神が懸ること。間接内流は、大神の御神格に照らされ、知慧証覚を得、霊国に在つてエンゼルの地位に進んだ天人が、人間の精霊に降りて来て、神界の消息を、人間界に伝達すること。
	チンコンキ シン 鎮魂 帰神	鎮魂は「みたましずめ」、帰神は「かみがかり」で別のもの。 鎮魂は、離遊の運魂を身体の中府に留めることで、精神統一法の一つ。大本では、「鎮魂帰神法」によって神懸り状態になることが行われていた。この場合、審神者（さにわ）が付いていて、どのような神が憑依しているか見極めなければ、霊障があり危険な状態に陥ることがあるので、大正 10 年以降は行っていない。
テ	テン カ ケツスイ チ 天火結水地	宇宙の一元の経綸活力の働き。 言霊「ア＝天」「イ＝火」「ウ＝結」「エ：水」「オ＝地」。
	テンダイ 天台	天の浮橋、水火の精台、水精火台。
	テンチ ボウハン 天地剖判	大虚空にエネルギーの中心（ポチ）を生じ、混沌とした大宇宙に進左退右の旋回運動が生じ、軽く澄んだものと、重く濁ったものとが次第に分離し、その結果、日月星、地球が生まれること。 現代の科学では、ビッグ・バン。
ナ	ナオヒ 直霊	曲霊（まがつひ）と共に一霊の状態を表現する言葉で、四魂と一霊には深い関係があり、四魂の状態に異変が起これば、その異変がそのま

		ま一霊に影響する。影響の度合いにより直霊から曲霊へ、曲霊から直霊へと変わる。直霊は理性・良心、曲霊は感情・欲望。 一霊が直霊の場合は、心は正常で善になって安定しているが、逆に曲霊になった場合、魔に染まり非常に不安定な心になって危険となる。
ニ	ニド イワトビラ 二度の岩戸開き	魂を表に、魄を裏に振り替えた世界を作ること。 体から光と熱が出るようになること。
ネ	ネンピカンノンリキ 念彼観音力	愛の念力。呼吸力。「彼の観音の（愛の）力を念ずれば」が原意。 「自己の愛の念力（念彼観音力）をもって相手を全部からみむすぶ。愛があるから、相手を浄めることが出来るのです。」 「相手の気は相手にまかす。合気は気を練る。念彼観音力に申す愛の構えこそ真の構えである。無抵抗主義には大いなる修行がいる。しかし心を結ぶには三月で足ります。」（開祖）
ハ	ハチリキ 八力	宇宙の三大元質（「霊」「力」「体」）の一つ「力」が発展して産み出したもの。力と表現されるすべての力、すなわち体力、精神力、生命力に関係して、これらの力が結ぶことによって産み出された動（どう、動く）・静（せい、静止する）、解（かい、解く）・凝（ぎょう、凝集させる）、引（いん、引く）・弛（ち、弛める）、分（ぶん、分ける）・合（ごう、合わせる）のこと。 対照力（たいしょうりよく、たたのちから）。
	ハッコウ タマ 八光の珠	金剛不壊の珠、真澄の玉。
	バンユウアイゴ 万有 愛護	神の愛。 「私は『武道の根源は、神の愛（万有愛護の精神）である』と悟り得て、法悦の涙がとめどなく頬を流れた。その時以来、私は、この地球全体が我が家、日月星辰はことごとく我がものと感じるようになり、眼前の地位や、名誉や、財宝はもちろんのこと、強くなろうという執着も一切なくなった。」（開祖）
フ	フトマニ 布斗麻邇	言霊原理の法則すべてを表す。 「布斗麻邇とは、（陽の）気体と（陰の）気体とが正しく打ち揃って美しい様をいう。」（開祖） この場合の気体は言霊（エネルギー、波動）の意と思われる。 融和統合された波動・・・をフトマニと言います。人類はこのフトマニによって生成化育されているのであります。・・・古事記上巻はこの波動の進展を説話にしたものでありますから、人の生命と魂の波動の発展の歴史書であり、特に宇宙中核生命の発展過程の歴史書ということが出来ます。（『万世一系の原理と般若心経の謎』） フトマニとは天の法則そのままの一定の形式即ち公式である。フトマニ即ち公式に当てはめて、物事の是非・善悪・正邪等の判断をしたり、現れてくる結果を経理・推論・推測したり、未来の出来事を予知したりすることなどをフトマニのウラナヒといい、古代のト占の一つである。古事記、特に神代記を言霊学的に解釈し、天の法則が古事記に書かれているという立場を取るとき、古事記を『布斗麻邇古事記』と呼

		ぶ。 『古事記』には 12 通りの読み方がある。」（出口王仁三郎） 川面凡児は、布斗麻邇とはみずからの靈魂が振動凝止鎮魂して、大神の靈魂に調和し、大神の御心を窺い奉る神人合一の業であり、中国の亀卜、卜筮などのように形象に現れた兆（かたち）によって神意を窺うものとは違う、と説明している。（『古神道・神道の謎』）
	フリタマ 振魂	手などを振って、体を震わせていくという禊行で、動的鎮魂法の 1 つ。神道家の川面凡児（かわつらぼんじ）の禊流神伝を参考にして取り入れたもの。宇宙の波動に共振し、靈感を高め、気を強める行。 「ふるたま」ともいう。
マ	マサカツアガツカツハヤヒ 正勝 吾勝勝速日	「勝とうと気を張っては何も視えんのじゃ。愛をもってすべてを包み、気をもってすべてを流れるにまかすとき、はじめて自他一体の気、心、体の動きの世界が展開し、より悟り得た者がおのずから勝ちをおさめている、勝たずして勝つー正（まさ）しく勝ち、吾に勝ち、しかもそれは時間・空間を超えた一瞬の機のように速やかに勝つーということじゃ。」 「正勝は屈せぬこと、吾勝はたゆまぬこと、勝速日は勝利栄光」（開祖） 合気道の理合や理念を表す言葉。
ミ	ミイズ 稜威（御稜威）	神や天皇の威光。
	みすまるの玉	永遠に栄え伝わる魂。 イザナミが三貴子を生んだ時、天照大神に与えた玉。 三種の神器（鏡、剣、勾玉）の一つである勾玉の名称。別名、八尺勾玉之五百津之美須麻流之珠（やさかまがたまのいほつのみすまるのたま）。 勾玉や管玉を緒で貫いてまとめて輪にしたものを御統（みすまる）の玉。 「即ち万物の霊長たる人間の限界を八とし、是に神は自然と云ふ尺度に符節符号を合し、神霊化学に依る啓示と物質科学に依る黙示の二を与へ、始めて十の満足の完成を見る事が出来る。是が無限の宝となり生きるものの重要な基本となつて、物の現象を無量に綴つて止まぬ、其の結を云ふ。 是が凡ゆる物と心の土台となつて、縦（たて）に横（よこ）に地球の全面全体に配布され、発展して止まぬ現象真理の活動体を、珠に象りて八尺瓊五百津御統珠と云ふ。」（中西光雲の言霊による解）
	ミソギ 禊	身を削ぐこと、すなわち身を削いで穢れを除くこと、心身を清めること。水につかって身体を祓い清めること。 合気道では、気枯れ（けがれ、霊的なエネルギーが欠乏している状態）を浄め、正しいエネルギーに満ちた状態にすることをいう。 「深呼吸をして血行をよくし、血液のかすをとる。これもみそぎである。祈りの言葉もまた祈りによって気のかすがとれるからみそぎである。」（開祖）

		霊注ぎ（みそぎ）、霊濯ぎ（みそぎ）、身削ぎ（みそぎ）。六根清浄。
	ミナクウ チュウシン 皆空の中心	円の中心、宇宙の中心。魂の円の中心。 「皆空に中心が生ずるとき氣を生み出します。」（開祖） 皆空が般若心経にある「五蘊皆空」の「皆空」と考えれば、読みは「かいくう」もあるか？ 「空」は何も無いのではなく、スペースがあるという意味。
ム	ムスビ 産霊	産（むす）・霊（ひ）。相反するものが結合して各自特有の「力徳」を産み出すこと。産巢日、産日。 陰と陽、霊（ち）と体（から）、火（か）と水（み）、巖（いず）と瑞（みず）、左（火足、ひだり）と右（水極、みぎ）、魂（こん、精神の霊）と魄（はく、物質の霊）、赤玉（塩盈つ珠、しおみつたま）と白玉（塩涸る珠、しおひるたま）、真空の氣と空の氣などが結び合って、新しい力を産み出すこと。
モ	もちろ	ももちよろず（百千万）、△○□や○△□全体で「もちろ」を表わし、よろずのもの、もろもろのものを表わす形象としている。三元。 合気道の働き（技）を表わす形象として使っており、「もちろの法則」は△（入身一足の理）○（円転の理）□（固成の理）。 ひふみ祝詞（のりと）【ひふみよいむなやこともちろ（一二三四五六七八九十百千万）・・・】の「もちろ」。
ヤ	ヤマビコ ミチ 山彦の道	五体の響きが宇宙の響きとこだまする合気道の妙諦。 「武産合気の武産の『武』のそもそもは『雄叫び』であり、五体の響きが宇宙の響きとこだまする『山彦の道』こそ合気道の妙諦にはかならない。」 「相手が歩いてくる。相手を見るのじゃない。ヒビキによって全部読み取ってしまう。」（開祖）
レ	レイブ ジッソウブ 霊武、実相武	魂の武道を霊武（氣の運用に主眼を置いた武道）、魄の武道を実相武（肉体の運用に主眼を置いた武道）。
ロ	ロツコンショウジョウ 六根清浄	禊（みそぎ）の状態。六根の執着を断ち、清浄な精神を所有し、靈妙な術を修得すること。 「六根」は煩悩や迷いを引き起こす目・耳・鼻・舌・身・意の六つの器官をいう。「清浄」は煩悩や迷いから遠ざかり、清らかで汚れない境地。

付表2. 合気道の霊的・精神的系譜

「武道の奥義も宗教（宇宙の真理）と一つなんおであると知って法悦の涙にむせんで泣いた」（開祖）

言霊学（真素美鏡）		言霊学（稻荷古伝）	国学・鎮魂帰神	禊法
中村孝道 (1787 頃-?) ・75 声の中心が「ス 主」 ・75 声は即ち天地の声 （真 洲 鏡） ↓		山口志道 (1765-1842) ・天地の水火(かみ)と人間(ひと)の水火(いき)と同一 ・火凝霊（図形） ・50 音（ウ→ア・ワ）	本居宣長 (1730-1801) ・『古事記傳』1798 年完 ↓ 平田篤胤 (1776-1843) ・聖書から「愛」「言葉」 ・天御中主神（創造主） （50 音の中心が「ウ」） ↓ 本田親徳 （ちかあつ） (1822-1889) ・本田霊学 ・一霊四魂三元八力 ・天地の具象を観察して ・鎮魂帰神法 ↓	
上田宇能 (1814 頃-1901) （孝道の姪/妹/娘？） ・出口の祖母） ↓ 出口王仁三郎	↓ ↓ 望月幸智 大石凝の祖父 言霊派国文学の泰斗 ↓		川面凡児 (1862-1929) ・6 段階の鎮魂（祓詞・鳥船・雄健・雄詰・気吹・身滌） ・川の禊、海の禊、庭内禊 ↓	
大石凝 （おおいしごり） 真素美 (1832-1913) ・本名は望月大輔、祖父の望月幸智を通じて、山口志道、中村孝道の言霊学を継承 ・天津金木学、日本言霊学を大成（神人合一によって宇宙の成り立ちを知るフトマニ） ・真素美の鏡（75 声）、75 声の中心が「ス」 ・水茎文字（○の中に点 ●：ス） ↓		長澤雄楯 （かつたて） (1858-1940) ・鎮魂帰神法 ↓	巽健翁（幸市） ・庭内禊 ↓	
出口王仁三郎 (1871-1948) ← Emanuel Swedenborg (1688-1772)（霊界探訪者） ・天御中主神（創造主）：「ス」の神：○の中にㄥ：スサノオ ・火水（かみ）と水火（いき） ・大本三大学則（天地の真象を観察して真神の体を思考すべし、…） ・鎮魂帰神法 ・山口志道から「体としての言霊学（50 音）、火水の体（大本）」、中村孝道から「用としての言霊学（75 声）、火水の用（日本）」 ↓		・内流 ・聖言(言霊)	二木（ふたき）謙三 (1873-1966) からと思われる。 ↓	
植芝盛平 (1883-1969) ・天の浮橋・妙精吸収・皆空の中心・山彦の道・摩擦連行作用・スミキリ・武産合気 ・真空の気と空の気の結び（魂の比礼振り）・無抵抗主義（一体化）・△○□ ・愛の武道（愛の気結び）「無抵抗なるが故に、はじめから勝っているのだ」 ・地上天国建設（我即宇宙：神人合一、自己完成→宇宙建国）：合気道の目的				・天の鳥船の行 ・振魂の行
神示・神伝	↑ 中西光雲 (1892-1969)・ 秋山清雲 (1917-2004)夫妻（1961 年まで岩間に在住。古神道家） ・武産の神示(天の村雲くきさむはら龍王のみ言)「神示によってはじめて現れたのが武産合気」 ・布斗麻邇（フトマニ）言霊『古事記』の解明 ・△○□の三元 九鬼隆治 (1886-1980)（最後の綾部藩主 九鬼隆備の長男、高御位神宮大宮司、合気神社祭主） ・宇志採羅金神（うしとらのこんじん）を祭祀 「私の武道は九鬼神伝の武道である」（開祖）			